

抗インフルエンザ薬耐性 ウイルスサーベイランス とその読み方

KEY WORDS

- ノイラミニダーゼ (NA) 阻害薬
- 薬剤耐性ウイルス
- インフルエンザウイルスサーベイランス
- 抗ウイルス薬の備蓄

Surveillance of antiviral-resistance influenza viruses.
Takato Odagiri (センター長)

国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター 小田切孝人

はじめに

インフルエンザの治療には、ノイラミニダーゼ (NA) 阻害薬が国内外で広く使われており、わが国では4種類 (オセルタミビル, ペラミビル, ザナミビル, ラニナミビル) の薬剤が認可され、一般の医療機関で処方されている。また、2014年には新型インフルエンザ対策としてNA阻害薬が無効な場合に備えて、ウイルスポリメラーゼ阻害薬のファビピラビルも条件付きながら認可された。わが国はNA阻害薬を世界で最も多用しており、耐性ウイルスの多発リスクの高い国として諸外国から注視されている。このため耐性ウイルスの動向を通年でモニターし、その情報を国内外に広く発信し続ける責務を負っている。わが国の耐性ウイルスサーベイランスは、2007/2008シーズンから全国規模で開始され、その情報は国内医療機関やWHO世界インフル

エンザ監視対応ネットワークと共有し、タイムリーに活用されている。本稿では、抗インフルエンザ薬耐性ウイルスサーベイランスの実態と意義、問題点を解説したい。

I. わが国の 抗インフルエンザ薬耐性 ウイルスサーベイランス への取り組み

2008年にノルウェーでオセルタミビル耐性のA (H1N1) ウイルス (ソ連型) が検出され¹⁾、あっという間に世界中に広がり、ほとんどの国で検出される同亜型ウイルスのほぼすべてがオセルタミビルに対して耐性を示すようになった。このような状況になると、オセルタミビルを一般医療機関で多用しているわが国への影響は大きく、医療機関における薬剤の選択戦略を早急に再検討する必要がある、国内での耐性